稲塚窯跡調査成果の概要

1　遺　跡　名　　稲塚窯跡（いなづかかまあと）

2　遺跡の種別　　生産遺跡

3　遺跡の時代　　飛鳥時代後半（７世紀後半）

4　所　在　地　　丹波市春日町稲塚

5　調 査 原 因　　稲塚川災害関連緊急砂防事業

6　調 査 主 体　　兵庫県教育委員会

7　調 査 機 関　　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
山田清朝副課長、大本朋弥技術職員

8　調査の概要

（１）今回の調査は、稲塚川の災害関連緊急砂防事業に先立つもので、６月初頭から実施している。調査は、来月前半に終了予定である。

（２）土器（須恵器／すえき）を焼いた窯跡を１基発見した。

（３）窯跡は小さな谷に面する急斜面（角度 30 度強）に造られており、いわゆる登り窯に分類されるものである。

（４）窯跡は残存状態が悪く、窯の焼成部の床(底)を中心として長さ 2.50m、幅 1.10m、深さ 30 ㎝が残っていた。

（５）窯跡の内部（床）には、少量の須恵器が焼成時の状態で残存していた。

（６）窯跡下方の斜面からは、窯跡から流れ出たと思われる須恵器が大量に出土している。

（７）焼かれた土器の種類は杯・杯の蓋・皿・壺・甕であり、特に杯とこれとセットとなる蓋が多く出土している。

（８）出土する土器の特徴から、本窯跡は飛鳥時代後半に営まれていたものである。

9　ま　と　め

（１）旧春日町域では初めての窯跡の調査例であり、丹波市においては市島町に所在する鴨庄窯跡群に次ぐ古い時期の窯跡である。

（２）同じ谷部内には稲塚１号窯跡・２号窯跡があったとされており、近接して古墳時代後期の円墳が数基存在することから、両者が密接に関連していたことが推定される。

（３）古墳時代が終焉を迎えようとする時期に、小規模な窯群を在地勢力が掌握していた状態を知ることのできる事例である。

稲塚窯跡全景（北西から）

窯跡内に残る須恵器１

窯跡内に残る須恵器２